

2014 年度卒業式 学長式辞

今朝、私はいつも通りに大学に立ち寄ってきました。私の大好きな埼玉大学のキャンパスは、今日も、いつも通りの美しさを誇っていました。桜のつぼみが、咲き誇れる日々を待ちわびるかのように膨らみ、ほころんで存在感を増すとともに、櫨をはじめとした木々がフレッシュでやわらかな緑の葉を芽吹く準備を着実に進めているようです。皆さんには、埼玉大学の、この美しいキャンパスのイメージをいつまでも心に留めてほしいと思います。

このように、春の装いを進める、希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに埼玉大学卒業式を迎えられた 1,717 名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。本年度の卒業生は、教養学部 195 名、教育学部 472 名、経済学部 359 名、理学部 202 名、工学部 489 名。この中には海外からの留学生 44 名が含まれています。皆さんが多くの困難を乗り越えて卒業することに対し、埼玉大学の役員、教員、職員、そして約 7,000 名の在學生を代表して、心から敬意と祝意を表します。

また、式典にご参列くださいましたご家族の皆様方に対しましても、心からお慶びを申し上げます。本日は誠におめでとうございます。

今年 2015 年。東日本大震災と甚大な原発事故をもたらした、2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震の発生から 4 年が経ちました。厳しい電力事情の中、入学式もないまま 4 年前に入学した皆さんが学修に励んだ成果を携え、人間的に成長して、多くの仲間達とともに今日、卒業します。卒業は次の成長への希望に満ちた節目と言われますが、皆さんにとっても、そして大学にとっても震災から 4 年経った今日の卒業式は一つの大きな節目と言えるでしょう。

今年は同時に、1995 年 1 月 17 日の兵庫県南部地震による阪神・淡路大震災から 20 年でもあります。皆さんが生まれて間もない頃の地震災害ですので、記憶している人は少ないかも知れませんが、この 1 月にはテレビなどでビルや橋が倒壊した当時の映像が流れました。私は、40 年前の 1975 年に埼玉大学を卒業していますが、学生時代の理工学部建設基礎工学科での勉強を契機に、構造物の振動現象を専門として研究を進めていたため、橋の被害状況調査を目的として被災地を訪れ、大きな衝撃を受けたことを昨日のこのように覚えています。それは地震発生から 2 ヶ月経った 20 年前の丁度今頃です。兵庫県南部地震はマグニチュード 7.3、最大震度 7 という巨大地震で、亡くなった方 6,434 人、全半壊した家屋 512,882 棟、被害総額推定 10 兆円もの甚大な被害を出す、関東大震災以来最悪の大惨事となりました。橋の被害も、道路橋にせよ、鉄道橋にせよ、凄まじいものであり、世界に冠たる耐震技術を誇っていた日本の「耐震工学神話」は脆くも崩れ去りました。私も含め、橋の技術者達は「兵庫県南部地震は橋の設計で想定していたものをはるかに超えていた」と言う以外に被害を説明できませんでしたし、それが正直な対応だったと思っています。

それ以来、構造物の地震に対する設計法が改善され、設計で想定する地震動をより適切に設定するとともに、免震や制震の考え方も積極的に取り入れられるようになりました。既存の構造物についても耐震補強が施されるなど、ほとんどの橋が地震対策工事を終えていました。その時に東北地方太平洋沖地震が起こったのです。幸いなことに、地震の直接的な作用

による橋の被害はほとんどなく、阪神淡路大震災の経験と教訓は活かされたと言えます。ただ、津波に起因した災害や事故は想像を絶するものでした。

東日本大震災のもたらした教訓は多岐に亘りますが、その一つに「レジリエントな社会づくり」の考え方があります。レジリエンス **resilience** とは精神的回復力などと訳される心理学用語ですが、元々は物理学用語で、外力によるひずみを跳ね返す力を表し、脆弱性の反対の概念です。Oxford 辞典では「the ability of people or things to feel better quickly after something unpleasant, such as shock, injury, etc.」または「the ability of a substance to return to its original shape after it has been bent, stretched or pressed」とあります。これを受け、「レジリエントな社会づくり」では柔軟性があり、自然災害や重大事故に強く、回復力のあるコミュニティを作っていくことを意味しています。「想定外」という言葉を安易に使うべきではないものの、将来のことに關しては何らかの「想定」をせざるを得ず、将来を確実に予測できないという意味で、「想定外」のことが起こることは「想定内」のことと言えます。したがって、防災という自然科学的なハード的対策による災害 **risk** への備え、すなわち **pre-risk** だけでは想定外のことが起きた場合に無力であり、この事前の備えに加えて災害時の対応 **on-risk** と災害後の復旧 **post-risk** という人文社会科学的なソフト的対策を想定するのが、レジリエントな社会という新たな考え方です。

歴史を振り返れば、人間は常に悲惨な災害や事故を教訓に前に進んで来ました。最近の、レジリエンスという新たな考え方も、自然災害や重大事故に繋がった人間社会の未熟さを真摯に受け止め、硬直化しがちな人間の考え方をいかに柔軟にできるか、ということの重要性を教えてくれています。

このことは個人についても言えます。失敗の繰り返しにより、自分を育てることの大切さを個人としても十分に認識する必要があります。勿論、失敗を前提として人は行動するわけではありません。しかし、失敗を恐れて行動しないのでは人は自信を持たず、前に進めません。また、人間は、現状に満足する心と競争する、向上の思いを忘れては、退廃への途を辿るだけになってしまうとも言われます。「より高い」何ものかを目指すことは、人間にとって不可欠の動機です。

日本の社会が抱えるもう一つの大きな課題にグローバリゼーションとイノベーションがあります。国を越え、あるいは専門分野の枠を超えて交流し、ものごとを思考する、判断する、表現する、そして新しい価値を創造する、そういった力をもつ人材が社会で求められています。

そもそも、イノベーション **Innovation** とは何でしょうか？ 再び Oxford 辞典によれば、「the introduction of new things, ideas or ways of doing something」または「a new idea, way of doing something, etc. that has been introduced or discovered」とあります。そうです。イノベーションとは単に技術革新を意味しません。有名な経営学者であるピーター・ドラッカーの言にあるように、「**Innovation is not flash of genius.**」つまり、イノベーションは天才によるひらめきでもありません。イノベーションとは世の中に普及する新しい概念を全般に指す言葉です。例えば、Apple 社の創設者であるスティーブ・ジョブズがすでにあるものの組み合わせから新しいライフスタイルを作り出したことは、まさしくイノベーションです。

そして、このようなイノベーションには、ジョブズがそうであったように、多様な人々と主体性をもって協働することのできる力、人と人の結びつきをうまく活用する力をもつことも重要であると言われてしています。

こう考えると、最初にお話しした2つの大震災を教訓とした人間社会の成長はいずれもイノベーションと言えます。阪神淡路大震災を経た進歩は科学技術を主としたイノベーションであるのに対し、東日本大震災からの新たな展開「レジリエントな社会づくり」は単なる科学技術イノベーションではなく、人文社会科学をも加えた多様な分野の協働によるイノベーションです。そのイノベーションを支えるのは、主体性をもって協働する私たち一人一人ということになります。

科学技術・学術審議会は2015年1月20日、「我が国の中長期を展望した科学技術イノベーション政策について」と題した中間取りまとめを公表しました。そこには以下のような記述があります。「イノベーション創出に向けて、基礎となる科学的な成果を着実に生み出すことはもとより、近未来を見据えて社会実装し、あるべき社会に変えていくための大胆な連携や交流の仕組みが必要である。我が国が進むべき道において自らなすべきことは何か。未来社会を担うべき若者たちの社会デザイン力と柔軟、迅速な行動力が鍵を握る。」 また、ゲーテの言葉である「**Knowing is not enough. We must apply. Willing is not enough. We must do.**」つまり「知るだけでは不十分、知の活用が必要。意思だけでは不十分、実行が必要である。」を引用して、こう続けています。「大学や研究機関、研究コミュニティ等の理念、そしてこれを推進する政策が教条にとどまることがあってはならない」と。

4月から、皆さんにはそれぞれに、新しい生活が待っています。これまでとは異なり、社会の一員として皆さんの責任は増えて来ることでしょうし、壁にぶつかることも多々あるものと思います。そんな時、ゲーテの言葉：

Knowing is not enough. We must apply. Willing is not enough. We must do.

この言葉を胸に、失敗を恐れることなく、自分の考えを柔軟にして迅速に行動し、困難に立ち向かって下さい。そして、たとえ失敗した場合でも、自身の未熟さを真摯に受け止め、硬直化しがちな自分の考え方を柔軟かつ多様にすることの重要性を必ず思い出し、一つずつ困難を乗り越えて成長を続けてほしいと思います。

私が学長になって1年が過ぎようとしています。この間、同窓生の一人として、母校、埼玉大学をより一層輝かせたいとの想いは強くなるばかりです。これからも、自他共に誇れる「知の府」としての埼玉大学を、活気があり活力みなぎる大学として埼玉から世界へと展開していきます。そして、埼玉大学は、学部という組織の枠や人文・社会・自然科学という学問の枠を越えた真の連携とシナジーをもたらし、これまで必ずしも顕在化しなかった潜在的能力を組織的に発揮させて、全国的な教育研究拠点としての光を放ちます。その上で、地域のニーズに応じた人材育成や地域活性化機関としての役割をも積極的に担っていきます。新たに同窓生になる皆さんにあっても、それぞれに活躍頂き、埼玉大学の重要な構成員として、存在感ある埼玉大学の一翼を担って下さい。

この1年の間には、いろいろな所でいろいろな人とお目にかかり、人との出会い、人との

つながりの大切さを痛感しました。多くの方々とお話しさせて頂く中でもっとも嬉しかったことの一つは、埼玉大学卒業生の活躍に触れて頂けたことです。今日の卒業式では、来賓として、埼玉大学同窓会長の大西利樹様をお招きし、皆さんに向け熱く語って頂きます。大先輩のお話をしっかり聞いて、埼玉大学の「凄さ」を感じ取って下さい。そして、皆さんにあっても是非、同窓生として埼玉大学に対する愛着を持ち続け、時には大学と連絡を取って人的ネットワークを強化し、グローバルに、イノベーティブに活躍されることを大いに期待したく思います。

人間の営みには、その空間を表す座標軸に加えて、同様に重要な時間軸があります。しかも一人一人に与えられた時間軸は有限です。皆さんが、これからも多様な人々と出会い、様々なことに触発され、かつ幸運にも恵まれてさらに成長し、それぞれに充実した人生を送られることを最後に祈念して、私の式辞とします。

平成 27 年 3 月 25 日

埼玉大学長 山口宏樹